

世界が一変したのは、短大生だった20歳の11月のことだ。大阪府の山本郁恵さん(34)はその日、友人の紹介で初めて知り合った男3人に強姦された。



強姦の真実 ③

男女10人で廃虚の病院で肝試しをしていた途中に友人とはぐれ、だまされて連れて行かれたのが加害者の家だった。「願いだら山に捨てるぞ!」と脅され、翌日の昼に解放されるまで半日以上、3人の男に何度も強姦された。抵抗して相手の機嫌を損ねたら、殴られるか刺されるかもしれない。「一番軽い被害で帰りたい」。その一心で、楽しんでるふりを必死で演じた。心配した友人から加害者の携帯電話に連絡があったが、男は山本さんの体の上で、「山本さんは家に帰った」と平然と嘘をついた。自分を壊していく男たちを見ながら、「生きて帰る。そして

被害女性「罪悪感なかったと思う」

絶対にこいつらを許さない」と、それだけを念じ続けていたことを覚えている。

■苦しめる自己嫌悪

事件後、山本さんを最も苦しめたのが、自分へのどうしようもない嫌悪感だった。被害に遭ったのは山口県光市の母子殺害事件と同じころ。加害者からの暴行に抵抗して殺された被害者のニュースを見る度に「格好いい」と感じ

た。「私は生きるために抵抗しなかった。私は汚い」

被害を受けたとき、ぼろぼろに傷つけられた心とは裏腹に身体的な反応があったことも自己嫌悪に拍車をかけた。自分を責め、自分の体を嫌い、ホームセンターで買ってきたプロックを体に打ちつけ、ガラスを割って手を血まみれにした。

心と体への自傷行為は、25歳のときに自殺未遂をしたことがきっかけで、自分の中の「生きたい」という思いに氣付くまで続いた。

苦悩の末、被害と向き合



被害と向き合いながら生きる山本郁恵さん。自己嫌悪に苦しんだ日々もあったという

い、乗り越えた。回復できるということをはかの被害者に知ってほしいと感じ、実名を公表している。

恐怖から無抵抗になる被害者の心理を、加害者は曲解する。山本さんを脅して集団強姦したにもかかわらず、加害者は解放するとき「また遊ぼうな」といって、連絡先を教えてきたという。山本さんは「彼らに罪の意識はなかったと思う」と振り返る。

■感情の理解力欠如

性障害専門医療センター(東京都)代表理事の福井裕輝医師(44)は「加害者の多くは女性が恐怖で無抵抗でいることがわからず、同意しているものだと思います。それが性暴力が発生する原因の一つだろう」と指摘する。

事件から3カ月後、加害者の3人は大阪府警に集団強姦容疑で逮捕された。全員19歳で少年院送致になったが、入所期間は主犯格が半年、他の2人は2週間という短さ。謝判でも、被害女性と「合意が

あった」と主張する被告は少なくない。実際、完全に倒錯した考えを持つ常習犯もいる。大阪府警に強姦や強制わいせつなど27件の事件で送検された男は「自分は合意のつもりだった。相手も許してくれていると思っていた」と話し、カッターナイフで女性を脅したことをこう弁解する。「刃物を見せると相手は冷静になってくれ、僕の話を聞いてくれる。突きつけないとキヤーギャー騒いでしまう」。福井医師は性犯罪者について、「罪の意識以前に、女性の感情を理解する能力が劣っている。専門の治療をしない限り、再犯の可能性がでる」と警鐘を鳴らす。

山本さんは訴える。「多くの男性は『自分は性暴力なんてしない』と思っている。でも、本当にそうでしょうか。女性が乗り気になえたとしても、心の中はわからない。わからないということこそ、自覚してください」

性犯罪に関する情報募集

✉Eメール
seihanzai@sankei.co.jp

☎ファクス
06-6633-1940

郵送は電話番号など連絡先を明記の上、〒556-8661(住所不要)産経新聞社会部「性犯罪取材班」係へ